



望遠鏡 400 年物語, 大望遠鏡に魅せられた男たち

フレッド・ワトソン 著, 長沢 工/永山淳子 訳
 地人書館発行 定価(本体 2,800 円+税) 398 頁

読み物
 お薦め度
 ☆☆☆☆★

原著英文タイトルは、STARGAZER, THE LIFE AND TIMES OF THE TELESCOPE, で、2004 年に出版されている。だから国際天文年を意識して書いたものではないが、この翻訳書が出版された今年、ガリレオが初めて望遠鏡を夜空に向けた年から 400 年になるのを記念した国際天文年なので、訳書の題名は時宜を得た良訳と言えよう。ただし、内容は目次で比べる限り歴史部分については、吉田正太郎著、望遠鏡発達史(上下)(誠文堂新光社 1994 年発行)とほぼ同じである。吉田さんの本が小中学生でも読めるように平易な言い回しを使っているのに比べて、ワトソンの本は大人向けのドキュメンタリー風を書いてあって、文献や用語集、巨大望遠鏡のリストもあり、しっかりしているの、こちらのほうが読み応えがある。

私は、当時東洋一と言われた岡山天体物理観測所の 188 cm 望遠鏡が完成した年に天文学者としてのスタートを切り、職業天文学者としての最後の十数年はすばる望遠鏡の製作にかかわっていたので、望遠鏡のことは大抵知っている積もりだった。

しかし、チコ・ブラーへの後で始まった屈折望遠鏡の歴史には多くの栄光と挫折が織り交ぜられていたのだった。ガリレオ、ケプラーの名前は彼らの天文学上の偉業のほかに、屈折望遠鏡の形式として残っている。また、ホイヘンス、ラムズデンの名前もアイピースで知っているかもしれない。しかし、地上で使う用途(戦争)よりは、天体観察用として発達したこと、レンズの材料である良質のガラスの製造技術やレンズ研磨の技術が

未発達であったうえに光学の理論ができあがっていない時代に、収差を小さくしてはっきり見えるようにと単レンズで焦点距離の長い空気望遠鏡へ動いていったこと、グレゴリーによる異なる媒質からなる色収差のないレンズのアイディア、ホールによるクラウンガラスとフリントガラスの組み合わせによるアクロマートレンズの試作、ラムズデンによる記録、ドロンドによる色消しレンズの特許取得とそれにまつわる紛争、などになると、私はこの本で初めて詳しく知った。

反射望遠鏡についても同じである。焦点に名前を残しているニュートン、グレゴリー、カセグレイン、ナスミスもいるし、金属反射鏡ではハーシェル、ロビンソン、パーソンズ(後にロス卿)などの名前が出てくる。その後、銀メッキ鏡、フーコーテスト、写真術、などと技術革新が続く。名前、事柄は知っていたが、この本でどのように発展していったかを知ることができて面白かった。

20 世紀に入ったところでヘールによる 60 インチ、100 インチ、200 インチ望遠鏡、その後 4 m 級の望遠鏡が数多く建設され、そして、すばる望遠鏡も仲間である 8-10 m 級望遠鏡時代に入る。

電波望遠鏡、人工衛星搭載の赤外線、可視光、紫外線、X 線望遠鏡のことにも触れてあるが本の構成上少しか触れてないのは仕方がないだろう。翻訳文はこなれていて、誤植も見つからない。

成相恭二(国立天文台名誉教授)